

現地職員からの報告レバノン

経済危機下で越冬支援を継続中

レバノンでは、昨年10月以降深刻な経済危機が続いています。

現地職員であるリナ(30代女性)とウィサル(20代女性)が、その状況と支援活動を報告します。

——現在の様子を聞かせてください。



リナ(L)物価が上昇しています。品物によって1.5倍～2倍です。野菜も肉も日用品もすべてが値上がりしています。主食のパンも値段は変わらないものの、サイズが小さくなったり重さが減ったりしています。

レバノンではこれまで、レバノンポンド(現地通貨)のほか、米ドルも使えました。しかし通貨危機によってドルが国中からなくなり、銀行のATMからドルを引き出すことはできなくなりました。銀行の窓口でも1週間に100ドルが上限です。レバノンポンドはドルに対する価値がどんどん下落し、昨年まで1ドルが1500ポンドだったのが、今では両替商で2000ポンド、闇市場では2400ポンドです。家賃などもドル払いならば以前と同じ金額だが、ポンド払いならば1.5倍払えといわれたりします。家賃が実質1.5倍になったということです。米ドルをたくさん持っている富裕層は非常に有利ですが、多くの庶民の生活はただただ厳しくなっているのです。



給油車

——人々の生活はどうなっていますか？

L こうした影響は特に難民社会を直撃しています。レバノン人も大変ですが、パレスチナ難民、シリア難民はもっと大変です。ほとんどの人が失業しその日暮らします。これまでも難民に対する就労制限は厳しく、定職を持つことが難しかったのですが、昨年秋に雇用担当大臣がレバノン国籍以外の就労制限をもっと強化し、パートタイムの仕事さえ簡単につけなくなりました。雇用主は就労許可がないと外国人を雇えません、そのため手続きにお金がかかるので難民は失業するのです。

電気は1日12時間(昼間6時間と夜間6時間)の計画停



インフルエンザで亡くなったカリムくん(前列右)

電です。レバノンは冬に雨や雪が降り、難民キャンプの道路は水浸しです。水漏れで部屋はジメジメしカビ臭く、毎日壁の水を拭かないとなりません。ブルジバラジネキャンプでは、この冬も2件の感電死事故があり、その一人は10代の少年でした。シャティーラキャンプでは、私たちが支援する補習クラスに参加していた2年生のカリムくんがインフルエンザで亡くなりました。元気なはずの子でした。42度の高熱が出たので病院に行ったのですが十分な対応をもらえず、別の病院についたところで亡くなったそうです。パレスチナ難民はレバノンの公立病院にかかれませんが、みな病気になるのを恐れています。深刻な場合は民間病院に行くしかありませんが、診察代が高額でだれもが行けるわけではありません。

——こうした状況に若者は何を考えていますか？

L レバノン人の友人たちとは経済状態の話をし、レバノン人の若者の多くも定職がなく、パートタイムの仕事を掛け持ちしたりしています。国会前での座り込みや道路封鎖などに参加している知人もいます。でもパレスチナ人は逮捕された



テントで暮らす一家はパンしか食べていない。子どもたちの歯はボロボロだった

ら大変なのでほとんど参加していません。「路上にはいないけれど Facebook にはいるよ」と言った書き込みもあります。

パレスチナ人の中では、もちろんトランプ和平提案が話題です。なぜ当事者でもない米国が、パレスチナ人の意見も聞かずに勝手なことを言っているのか、金で解決するつもりかと、皆言っています。アブバス議長については、彼で何とかなるのか?という意見と、他に誰がいるのか?と意見が割れています。



テント生活が続く

海外に出たいという声若者の間では強いです。私はこの国を離れたとは思いません。故郷はパレスチナですが、私はレバノンで生まれ育ち、ここを愛しているからです。



——燃料配布など越冬支援の様子を聞かせてください。

ウィサル (W) 山間部でシリアから避難してきたパレスチナ人と地元の脆弱なパレスチナ人1500世帯へ燃料を配布中です。この冬の燃料配布はこれまで以上に重要です。私たち以外の支援がほぼないからです。燃料支援は人々の命綱です。零下10度になる日もあり、テントの中はストーブをつけても毛布をかぶったりコートを着ていても、とても寒いのです。

人々は食物よりも暖房を優先せざるを得ず、十分な食事をしていません。ジャガイモや豆、引き割り小麦を食べられればよい方です。「パンと紅茶だけ」「何か月も肉など見たことがない」「ジャガイモを茹でただけ」。国連の支援金が遅れたために野草を食べたとも聞きました。1日2食は当たり前で、1日



1500世帯へ燃料配布



燃料配布には多くの人が集まった

1食の家庭も増えています。燃料の配布場所までのわずかな交通費も出せずに、取りに来られない人がたくさんいるため、給油車を回しています。

——危機状況はどんな問題を引き起こしていますか?

W 気温が零下になる山間部で、家賃を払わないからと厳冬の中、家主が母親と幼い子どもを家から追い出したと聞きました。路上生活者もいるそうです。国連の小学校にも行かず家で過ごす子どもが増えました。大学の奨学金を得たけれど、交通費や教科書やノートを買うお金がないのであきらめたという話も聞きました。

こうした状況で、大人も子どもも心理状況が悪化しています。父親が失業し、家計が悪化し、プレッシャーが高まって、家族の不和が広がっています。国連の学校でも、教員たちがいつ解雇されるか不安なため、生徒へ影響が出ています。難民キャンプでは、収入を得るためだけに政治団体に加わる若者が増えていると言われます。

——政治状況についてどのように考えますか?

W レバノンの「革命」に私たちは最初興奮しましたが、いまでは批判的です。道路封鎖が続いたために、多くの人が職場にたどりつけず失職しました。特にパレスチナ人への影響が大きいのです。抗議活動は何も生みだしていないばかりか、結果的に誰のためにもなっていないのです。また街頭での放火事件の犯人がカフィーヤ（パレスチナスカーフ）をしていたという噂が広がり、パレスチナ人が犯人だと冤罪が生まれました。何かあるとすぐにパレスチナ人のせいとされるのです。レバノン人とパレスチナ人の分断はこれまで以上に進んでいると感じています。トランプ中東和平提案については SNS では活発に討論され、難民キャンプでも抗議行動やセミナーなどが開かれています。しかしレバノンの政党はすぐには明快な反対表明をせず、人々は見捨てられたと感じています。

こうした厳しい状況だからこそ、脆弱な家族を支えるために、私たちは越冬支援を続けています。そして、日本の皆さんのおかげでできる支援の一員として働いていることを誇りに思っています。